

熱心黨をめぐる二三の問題

相 沢 文 藏

——古代の世界に於てもユダヤ人は世界主義や国家を解
体せしめる酵素であつた——

(モムゼン・ローマ史)

ま え が き

永遠のさすらい人ユダヤ人の祖国はユダヤ戦争 (66-70 A.D.) を以て実質的には滅亡したのであるが、これはローマ属州としての弱小国ユダヤが世界帝国ローマに敢て挑んだ戦争であり、常識的には最初から絶望的なものがあつた。当時の地中海世界はあけてローマ的秩序に入りつゝあり、ローマの平和 (Pax Romana) の一色に塗りあはれんとしていたなかに、独りユダヤ人のみをかく駆り立てたものは結局数ある属州中ユダヤにのみ存した特殊な歴史的社会的事情に帰せられるが、これについての論考には今は立入らず、とにかくこのユダヤ戦争を指導して祖国を亡国に陥らしめた責任者は、打倒ローマを叫んで、直接行動によつてローマの政治的経済的重圧を脱し、その伝統的な理想である神政政治テオクラチアを実現せんとした狂信的な国粹団体である熱心黨ゼイロータイと称する者達であつた。このユダヤ史の進む方向を決定したとも云うべき熱心黨ゼイロータイの歴史的意義は大なるものがあるが、この党派の成立の時期、創始者及その運動の性格等

に關する從來の見解には必ずしも妥当と思われぬものがある。本稿はこれらの問題についての不可欠の史料である同時代のユダヤ人歴史家ヨセフス正しくはイオセプホス(36-100 A.D. circa)の著書を再吟味することによつて、筆者のまづしい見解を整理したものである。この知られること少いヨセフスについての素描を付記するのは史料としての彼の著書の性格を理解する上に不要ではないであらう。彼は元來エルサレムの高貴な祭司出身であり、その身分上からも親ローマ的傾向強く、ユダヤ戦争の開始にあたり、己の意に反してガリラヤ地方の防衛の責任者に任ぜられ、対ローマ抗戦の第一線を担当した。併し機を得てローマ軍に投降し、それ以後は遠征軍の幕僚として祖国の降伏のために協力したのみならず、その後半生をローマにあつて皇帝の庇護の下に送り、ユダヤ史に關する龐大な著述を行つたという極めて特異な生涯を送つた。彼の売国的とも見える行動も、祖国の破滅をローマへの降伏によつて食いとめんと計つたに外ならず、従つて事態の熱心党的解決法には対蹠的に反対の立場にあつたのであり、その著書に於てもこれに對して仮借ない惡罵を加えている。従つて熱心党的の本質について、彼の立場に發する避けがたい歪曲が加えられている点を見逃し得ない。本稿に於て使用さるべき彼の著書はユダヤ戦記(Bellum Judaicum-Bell. と略す)とエダヤ古記(Antiquitates Judaicae-Ant. と略す)となるであらう。

熱心党的の起源と成立

ひとむきに世界帝国の形成に邁進しつゝあつたローマの頂上の發達の過程に於て、エジプト及シリアは既に早くローマ屬州として再編成され終り、かくてこれらをつなぐ陸橋としてのパレスチナの地、而してその中心たるユダヤも続いて屬州に編入されるのは單に時間の問題であり、それが実現されたのは紀元後六年であつた。併しその以前からユダヤは名目のみの獨立国たるに過ぎなかつた。新約聖書に於てその名を知られるヘロデ王(37-4 B.C.)は人民に向

つては東方的專制君主の性格を強く押し出していた一方、ローマに対してはその實質に於て服屬關係にあつた盟邦君主 (reges socii) の一人に過ぎず、その治世中からユダヤは完全にローマの勢力範圍にあつたとすることが出来る。彼はローマに対する貢納關係によつてつながる追従的親交を失わざらんと終始これつとめ、又その一の現れとして國內のヘレニズム化政策をも強行した。これらはすべて人民の經濟的負担に於てなされたのは云う迄もない。さなきだに彼等固有のヘブライズムの優越性を信じてゆずらなかつたユダヤ人はこの異教的ヘレニズムの抗し難い侵入に対して彼等の伝統崩壞の危機を鋭敏に感じとり、かくてそれは重い經濟的負担による不満を更に強めるに至り、ヘロデ王は、特に治世の末年、人民の怨嗟の的となること著しいものがあつた。併し彼の生前中はその重圧の下にあつて人民の反感は未發のまゝにくすぶり続けていたが、その死と共に一連の騷擾が領内各地に続發するのである。彼の後継者アルケラウスの王位相続はローマの承認を必要とし、その間暫時の政治的空白が生じたことは社会的アナキーに更に拍車をかけ、「この機會は王位に野心をもつ者達を誘發した」(Bell. II 55)のであつた。この騷擾の指導者のうちに、以前ガリラヤ地方を劫掠してヘロデ王に誅殺されたエゼキアスの子ユダなる者が居た。「彼は多数の者を集め、ガリラヤのセブホルスの王室の武器庫を襲つてこれを開き、従える者を武装せしめた」(Bell. II 56)。又「彼は王位に対して野心をもつていた」(Ant. XVII 270)とされる。この頃同じく王位をうかがい、王冠をいたゞいて叛した者は外に二三の例が伝えられる (Bell. II 57, 62)。これらの騷擾はガリラヤ、ユダヤ一帯を席卷し、大なる社会的混亂を伴つたことは、それらがシリヤより派遣されたローマ軍によつて漸く鎮壓され、「約二〇〇〇名の者が磔刑に処せられた」(Bell. II 75)ことから察せられる。この頃親ローマの一部ユダヤ人はこの機にユダヤをして屬州に併合せられんことをアウグスツスに上訴しているが、これはこの際には實現を見なかつた。それは一方に於てローマに赴いて即位の認可運動を行つていたアルケラウスが一応その目的達成に成功したからでもあつた。彼はかくて前途の多難を予想せ

しめつゝ新王としての統治を始めたのである。但しヘロデ王の故領はその子達の間大体三分され、アルケラウスはユダヤとサマリヤを領するに過ぎず、ガリラヤはアンティパスの領土とされたのであつた。アルケラウスには父王の如き威圧を感じしめるものなく、その人心宥和策にも拘らず、社会的混乱はやまなかつた。その治世約一〇年の後ユダヤ上層階級はサマリヤ人と共に再度アウグスツスに対しアルケラウスの暴政を上訴した為、その希望は容れられ、ユダヤ、サマリヤはローマ属州とされることになつたのであつた。かくてその属州化はユダヤ上層階級の希望を叶えたという形式に於て実現を見たのであるが、かゝる事態解決策は時のローマの世界化の傾向に順応したものと云うべく、これは、ローマよりの独立解放を叫んでやまず遂にユダヤ戦争にまで事態を推進せしめた熱心党的行方と比較して正に對蹠的なものがある。ともあれ、ユダヤのローマ属州化の時期は若干早められたに過ぎず、早晚これは何等かの形で実現さるべきものであつた。かくの如くして、アウグスツス直属の属州とされたユダヤは直ちにローマの直接の徴税の対象となつたのであり、その前提として戸籍登録が行われるのである (Ant. XVIII 2, ルカ二二)。これは云う迄もなくユダヤ人の財産調査をも意味していた。ヘロデ王朝に代る新しき収奪者としてのローマの、この兵力を後に控えた戸籍登録はユダヤ人一般に大なる衝撃を与えたことは想像に難くない。この人心の不安動揺を背景として反ローマ的騒擾がまき起されるのである。それは先ず、ガリラヤ人 (Galilaeos) ユダなる者を指導者としたものであつた。彼は「課税に應ずるは隷従を招くに外ならず」 (Ant. XVIII 6) とし、又「神をさしおいて、死すべき者に仕えるは怯懦なり」として叛乱を激成した。彼は独自の党派の學者 (sophists) であり、他には見られない者であつた (Bell. II 118)。彼が指導したこの党派をヨセフスは、パリサイ、サドカイ、エッセネに次ぐ第四教派 (Tetarte philosophia) と呼ぶ (Ant. XVIII 9)。このガリラヤ人ユダの末路についてはヨセフスは何の記すところもないが、その叛乱は遠からず鎮圧され、彼は誅殺された事は使徒行伝 (五三七) の記事によつても察せられる。ユダのこの運動

は失敗に終つたにしても、その後には及ぼした影響には大なるものがあつた。「この不敵な行為から恐るべき災害が生じた。戦争は相ついでおこり……主立つた者は掠められ、破滅を招いた。民の爲をはかるとの御題目も実は私慾のために外ならなかつた……」(Ant. XVIII 6)。ヨセフスはかくの如く記している。併しこれはユダの運動そのものよりも彼の思想系統をつぐ後の熱心党によつて指導されたユダヤ戦争による災害にまで言及しているものと解さねばならぬ。ユダによつて指導された、ヨセフスによれば第四教派とされる党派の思想は後年のユダヤ戦争を指導した熱心党にまで流入し、發展させられていることから、ユダの党派は熱心党と混同され、遂に同一視されるに至り、かくてユダの党派は熱心党そのものであり、ユダは熱心党の創始者とされるのである『イエス時代のユダヤ民族史』なる劃期的名著を出した E. Schürer は同著に於て、このユダに関して次の如き必ずしも明確ではない表現、即ち「ユダの徒は自ら熱心党と称した激しい狂熱的な党派を創設した」として以来、後続の文献にこれは反映され、ユダを以て直ちに熱心党の創始者とするものが多い。(11)

併しヨセフスの記述を虚心に吟味する時、たとえ熱心党の思想的起源はユダに發していると云い得るにせよ、ユダの党派をそのまゝ熱心党とすることは出来ない。これを前述の如く見るのは史料に対する読み込み過ぎと云わざるを得ず、ユダの頃にはまだ熱心党は存在しなかつたのである。明確に一の党派名として熱心党が史料の上でその姿を現わすのはユダヤ戦争開始後である。ネロ帝より派遣された遠征軍の将ウエスパシアヌスは先ずユダヤ戦争の前哨戦とも云うべきガリラヤ戦争においてこの地方を鎮定したが、この時にヨセフスの投降があつたのである。この際ガリラヤ地方の指導者達のうちエルサレムに遁入した者達が居り、その最も有力な者として、かつてガリラヤの指導権をヨセフスと争つたギスカラのヨハネなる人物がいた。迫り来るローマ軍の強襲の前にして浮動するエルサレムの人心の不安に乗じて、彼は忽ちにしてデマゴグとなり、ローマとの和平をひたすら願う上層市民との間に激しい対立を生

するが、彼は実力を以てその指導権を奪い、かくてエルサレムを強引に抗戦に巻きこんで行つたのである。この頃にはエルサレム市内に於てローマ人及親ローマ的な国人を、懷中にひそめた短劍 (sica) を以て殺害していた暗殺団の活動も行われ、対ローマ抗争は次第に緊張してゆきつゝあつた。このヨハネの徒は神殿をも乗取るに至り、これを抗戦の本管とし、大祭司をも意のままに任免する等、政教二途に猛威をたくましくしていた。かゝる徒党は「この上ない悪業に熱中しながら、あたかもよい事をしてゐるかに振舞ひ、彼等自ら熱心党と名乗つた」(Bell. IV 159)。熱心党という団体がその明確な名称を以て出現するのはこれを以て始めとするのである。熱心党はかくてユダヤ戦争の経過のうちに、反ローマ的氣勢が最高頂に達した頃、これを集中的に代表した尖鋭分子の自称であつたのである。熱心党の成立は正にこの時期に於てであつて、これに先立つ六〇年前の戸籍登録の時のガリラヤ人ユダの創設にかゝるものではないのである。併し熱心党の反ローマ的思想系統を辿る時に、ユダにまで遡ることは明かである。ユダの運動そのものは失敗に終つたにせよ、その思想系統をつぐ反ローマ抗争は機を得ては散發を見たことはヨセフスの記述を通じて覗うことが出来る。ユダの三人の子達も次々に同主義の運動の指導者となり、いずれも捕えられて誅殺されている。ユダに起源する反ローマ抗争は、ローマの支配とその強圧を通じて次第に激化され、遂に熱心党の成立にまで立到つたのであるが、それはユダヤを対ローマ戦争にまで駆り立て得たのであり、その強大にして大規模であつた点、かつてのユダの運動とは比較に絶するものがあつたのである。

かくてガリラヤ人ユダによつて指導された反ローマ的党派を熱心党となし得ないことは明かであろう。それではユダの徒は何と称せられていたであらうか。前述の如く、ヨセフスはこれを第四党派としているが、これはパリサイ、サドカイ、エッセネに次ぐ四番目の教派との意に解さなければならず、これを固有の党派名とすることは出来ない。ヨセフスはユダの名をあげる時に、「ガリラヤ人ユダなる者」*tis anēr Galilaios Ioudas* (Bell. II 118) とつて

る。Galilaeos はガリラヤ人と解し得るにしても、一方パリサイの徒 (Phariseos)、サドカイの徒 (Sadducaeos) の如く、これを一の党派又は団体名に解することも出来る。ガリラヤの地は古来異教文化の脅威を受けること大きく、「異邦人のガリラヤ」(イザヤ九)として正統を誇るユダヤ人から蔑視され来つたことは新約聖書を通じても察し得られる。ヨセフスはユダをガリラヤ人と呼ぶ時、それはかゝるユダヤ人の一般的感情を充分にふくめているのである。それは「ガリラヤの徒輩」の意に近く、単なる地理的表現ではなしかゝるニュアンスをこめているのである。かくてユダの党派は、かゝる意味において、単に「ガリラヤ人」と呼ばれていたに過ぎないと考えられる。少しく時代は後になるが、「教会史の父」エウセビウス (260? - 340) は、ユダヤ人中の異端をあげ、パリサイ、サドカイの次にガリラヤ人 (Galilaeos) としてゐるのは、^(五)明かにこれを「一党派として指している」のであり、以上の推定を支持するであらう。

註

- (一) Encyclopaedia Biblica col. 2629.
- (二) E. Schürer, Geschichte des jüdischen Volkes im Zeitalter Jesu Christi, 1887. I. Bd. S. 407. これは後何回か版を重ねた。
- (三) 筆者の寓目し得たもののみで次の通りである。
Hasting, Dictionary of the Bible, Vol. I, p. 348.
C. F. Kent, The Life and Teaching of Jesus, 1913. p. 34.
K. Kautsky, Der Ursprung des Christentums, 1922. S. 312.
M. Dibelius, Jesus, 1939. (神田盾夫訳四九頁)
Schürer の影響なしに同じ見解をとるもの
H. Graetz, Volkstumliche Geschichte der Juden, 1989; neue Ausg. 1923. I. Bd. S. 519.

(四) マタイ二六七三・マルコ一四六九・ヨハネ七四一、五二等

(五) Eusebius, *Historia Ecclesiastica*, iv 22.

熱心党のシモン

熱心党の思想的起源はガリラヤ人ユダ、乃至は更に遡つてその萌芽を求めることも出来るが、その名をもつた明確な一の党派として成立したのはユダヤ戦争開始後であつた。ところで、熱心党なる名称によつて何よりも先に思いあたるのは、十二使徒中に見える「熱心党のシモン」なる者の存在である。これは如何なる者であらうか。この者は、始め熱心党に属していたが、イエスの教説にふれ、悔い改めてこれに従う者となつたとする説はイエスの運動が行われた紀元後三〇年頃に、熱心党なるものが既に存在していたことを前提として居り、これが誤りなることは前節によつて明かである。又用語上から見てもこの説は支持し難い。ルカ(六・一五)と行伝(一一・三)の Simon ho Zelotes を熱心党に所属したシモンの意に解するのは無理であり、これは単に、熱心なる者(信仰又は律法遵守に)と解さねばならぬ。以上の両書と違つてユダヤ的色彩の遙かに強いマタイ(一〇・四)マルコ(三・一八)に於ては、Simon ho Kananaios となつてゐる。Kananaios は当時のユダヤ人の常用語アラマイ語の Qananaea(熱心なる者)のギリシヤ語形への音写であり、前記のルカと行伝に於てはこれと同意味のギリシヤ語 Zelotes を以て置きかえたに外ならぬ。かくてこれを党派名に解するのは更に困難となるのである。又「シモンは始めイエスの使徒であつたが、その歿後熱心党に加入した」とする見解も牽強のそしりを免れない。それは用語上の困難の外に次の理由による。イエスのみならず、使徒や福音書記者達は、エルサレムの陥落を招来した熱心党的行き方に終始対立していたことは明かであり、使徒の中から後に熱心党に転向した者がありとすれば、福音書に於て、かのイスカリオテのユダに劣らぬ激しい筆誅を加え

られずにはいなく答である。

註

- (一) N. Levison, *Jewish Background of Christianity*, 1932, p. 171.
- (二) Diberius, op. cit. (邦訳四九頁)
- (三) Jackson and Lake, *The Beginnings of Christianity*, 1920, vol. 1, p. 425.
- (四) *Encyclop. Biblica*, col. 2629.
- (五) K. Lake, 'Simon Zelotes' in *Harvard Theol. Rev.* Jan. 1917.

ガリラヤ人ユダ

熱心党^{ゼローテス}の創始者ではなく、その思想的準備を行つたに過ぎぬガリラヤ人ユダに関しては再検討を要すべきものが多い。それは彼の素姓、活動の場所、思想内容従つてその運動の性格についてである。第一に彼はヘロデ王の死後騒擾を引起したユダ(エゼキアスの子)と同一人物なりとする見解がある。Schürer がこれら両ユダを「確實に(sicherlich)同一人なりとして以来、後継文献の多数がこれに倣つている。併しいずれも、同一人と見るべき理由をあげたものはない。その然らざる事はこれまでの叙述からも察し得られるであろう。併し更にこれを明かならしめる為に、ヨセフスの記述を何ものにもとられることなく再吟味する必要がある。以上の両ユダについては Bell. と Ant. の双方に記述があるが、その中核に於ては共通している。先に引用した部分もあるが、対照の必要上併行的に配列してみよう。

エゼキアスの子ユダ

エゼキアスの子ユダはガリラヤのセブホルスで多数の者を集め、王室の武器庫をおそつてこれを開き、従える者を武装せしめた……(Bell. II 56)。

……エゼキアスの子ユダはガリラヤのセブホルスで多くの悪党を集め、その王宮をおそい、武器をうばい、従える者を武装せしめ、……王位に対して野心をもつてゐた(Ant. XVII 220)。

ガリラヤ人ユダ

ローマの治下において、ガリラヤ人ユダなる者が国人に対し、神をさしおいて死すべき者に仕えるは怯懦なりとして、叛乱を激成した。彼は独自の党派の学者で、他に見られぬ者であつた(Bell. II 118)。

……戸籍登録の時……ガウラニテスのガマラ(三)のユダなる者が、パリサイのザドクと結んで国人を叛乱に引入れんと狂奔した。彼等は課税に應ずるは隸従を招くに外ならずとし、自由を主張せよとすすめた(Ant. XVIII 4f.)。

ヨセフスのこれらの記事から両ユダを同一人物とすべき如何なる根拠を引出し得るであろうか。明かに両ユダは別人であつて、約一〇年を隔てゝ大体同性質の叛乱を行つたに過ぎないのである。相似点よりも差違点の方が遙かに多い。更にこれらを別人としなければならぬ根拠に少しく立入りたい。ヨセフスの記述の一の定型とも云うべきものとして、彼は人物の名をあげる時、その人物の身分素姓を出来る文明にするのが常である。前者のユダを「エゼキアスの子」としているのが既にその例であるが、更に顯著な例がある。ガリラヤ人ユダには三人の男子があり、いずれも反ローマ抗争の指導者として処刑されている。ヨセフスの記述によると、最初の二人については、「戸籍登録ケンソスの時、叛乱を企てたユダの子」なる説明句を冠してその名があげられて居り(Ant. XX 102)、他の一子についても「ガリラヤ人と呼ばれたユダの子」(Bell. II 433)としてゐるのである。ヨセフスのかかる記述形式よりすれば、以上の両ユダが同一人物であり、約一〇年を隔てゝ再び事を挙げたとすれば、必ずその旨を含んだ何等かの記述がなければなら

す、かくて両ユダを同人物とすることは出来ないのである。前者のユダがローマ軍の鎮圧を「幸にのがれて再挙はかつた」^(四)とするのは、これらを強いて同一人と見んとするのに発する牽強に過ぎず、前者のユダはその頃の一連の騷擾の指導者と共にローマ軍に捕えられ、磔刑に処せられた約二、〇〇〇名のうちに入つていたと見るべきであらう。ユダなる共通した名を取りあけて見ても、ユダヤ人にあつて最も普通なもの一であり、ヨセフスの Bell. のみに於ても十指を以て数える同名異人のユダが登場しているのである。

次にガリラヤ人ユダの叛乱運動は何処に於て行われたかの問題である。戸籍登録^{ケンセン}が行われたのは、新たに属州となつたユダヤ、サマリヤ、即ちアルケラウスの故領に限られたことから、ユダの叛乱は当然ユダヤに於て行われたとする見解がある。^(五)ヨセフスはこの点について伝えるところはない。併し戸籍登録^{ケンセン}がガリラヤに於ては行われなかつた故を以て、直ちにそれが行われたユダヤに於て叛したとするのは早計の感がある。ローマが戸籍登録^{ケンセン}を強行するためには、クレニウスの如き、東方経略の経験者を特に派遣する必要があつたのであり(ルカ二)、この際反ローマの旗幟を明かにした叛乱運動を企て得るだけの間隙があつたとは思われない。結局はユダヤまで彼の運動は波及したにせよ、それは彼の出身地にして、勢力を有したガリラヤに於て行われたのではなからうか。併しこれを決定するためには更に広い史料と文献の渉獵を要すべく、暫く問題として保留しなければならぬ。又ヨセフスの「ユダは学者であつた」とする記述を根拠として、彼は叛乱の如き實際運動を行つたのではなく、反ローマ的な教説を宣伝したにとゞまるとする見解^(六)がある。併しヨセフスによつて「学者 *sophistes*」とされてゐる者で騷擾の指導を行い、捕えられて処刑された例はユダの時期を遡ること遠からぬヘロデ王の末年に見られる (Bell. I 648)。その上この運動を單なる思想運動にとゞまつたことが出来ないものがある。たとえガリラヤでは戸籍登録^{ケンセン}は行われなかつたにせよ、元來ユダヤに比して遙かに反ローマ的精神が旺盛であり、しかも事を行うに好条件の揃つたガリラヤにおいてそれが行われた

ものとして論者の云う如くそれは単に思想運動であつたにしても、それは最早そのものとして終ることは出来なかつたのである。この頃普通見られた例として、特異な教説を唱える者の許には多数の民衆が集るのであり、それを危険視して解散せしめんとするローマ軍とは屢々衝突して騷擾の起因となつたのである。誠に「彼も亡び、従える者も散らされた」(行伝五三七)とする理由があり、単に思想運動にとどまつたすることは出来ない。

最後にユダや後の熱心党の思想内容、これに發した運動の性格は如何なるものであつたか。結論的に云えば、ユダヤ人の歴史が、理想と現実との背馳に於て展開されて來たその過程に於て、次第に發達し、その内容も豊かとなり、彼等に未來への希望と慰藉とを供して來た默示文學的メシア思想がそれであり、而してそれらの運動はこの思想に發したメシア運動と見なければならぬ。「選ばれた民」として、ユダヤ人は約束のメシア出現を待望しつゝあつた点に於て共通していたにせよ、そのメシアの性格及その出現に關する見解には色々な差違があつた。その出現は一にかゝつて神意によるにせよ、單に信じて待つにあきたらず、その到來の時期を早め、又はその機縁を作るためには人間的努力を必要とする者と狂信する者を生じて來るのである。一方民衆は特異な言動をなす者の中にメシア性を見出さんとし、一メシアならんかと論じていた(ルカ三・五)のであり、かくて自らをメシアなりとする者も現れるのである。前記の両ユダの頃、「王位に対して野心を有した」一連の騷擾の指導者を見るが、「メシア即ち王」とするヘブル的常識から彼等は自らメシアたるを主張したとせざるを得ない。ヨセフスはユダヤ人をしてローマとの戦争に駆り立てたものは、「聖なる書の時來つて彼等のうちの或る者が全世界を支配すべし」という曖昧な預言であつた(Bell. VI 388)とする。これは彼の好意的でない立場を反映してはいるが、メシア思想を意味している。又「ユダのメシア的役割は明かでない」とする説は、メシアはイエスのみとする信仰の立場に立つた見解である。イエスのメシア運動はユダ以來機に應じて散發していた直接行動によらんとするメシア運動の止揚の立場を次第に明かにしつゝ、それと対立交錯のう

ちに展開されてゆく。かくて信仰の立場を離れてすべてこれらを同一平面上に把握しなければならぬ。

ユダ及後の熱心党的運動の思想を彼等に好意的でないヨセフスや新約聖書の中にさぐり出すのは容易ではない。又「武器をとつた彼等の手になる文書は期待出来ない」^(八)のであり、その思想を反映している黙示文学も殆どない。彼等の思想を把握するためには、その背景にある当時の社会情勢の分析をも必要とし、更に彼等の思想ならびに運動はイエスのそれにも投影されている限り、これをも含めてより広い視野から改めて論究を進めなければならぬ。それは既に本稿においてよくなし得るところではなく次の機会にゆずらねばならぬ。

註

- (一) Schürer, op. cit. S. 407.
- (二) Graetz, op. cit. S. 519.
J. Wellhausen, Israelitische und jüdische Geschichte, 1921. S. 331.
S. Matthews, A History of the N. Testament Times, 1929. p. 135.
J. Krausner, Jesus of Nazareth, 1926. p. 162.
W. Oesterley, A History of Israel, 1932. p. 366, p. 386 etc.
これについては何事か云ふ得ぬとするもの
- E. Meyer, Ursprung und Anfänge des Christentums, 1921. II. Bd. S. 403.
これを明かに別人としながら理由をあげぬもの Jackson and Lake, op. cit. p. 424.
- (三) ガリラヤ湖東岸地方を指し、ガマラはその中心小都市、この地方は広義のブリタヤに入る。
- (四) Graetz, op. cit. S. 520.
- (五) Schürer, op. cit. S. 440.

- (六) F. Jackson, *Josephus and the Jews*, 1930. p. 264.
- (七) W. Bousset, *Die Religion des Judentums*, 1926. S. 224.
- (八) *ibid.* S. 88.